

## 【史料紹介】

### 中井源左衛門家文書「敷石御寄付連中録」と

#### 野寺共有文書目録・石原宿文書目録

青柳 周一

#### 一 「彦根古文書を読む会」のこと

まず、昨年度より活動を行っている「彦根古文書を読む会」について紹介させていただきたい。

筆者は本学にあつて、「古文書解読A1」および「A2」を毎年開講している。これらは史料館の収蔵史料を用いて、近世のくずし字の基本的な読み方を受講者に習得してもらうことを目的とした授業である。

また教養教育科目も数年おきに担当しており、今年度は「日本の歴史・近江から読み解く地域間交流の歴史」というテーマで開講した。筆者は本学への赴任以来、なるべく担当する授業の内容を史料館収蔵史料に基づいて組み立てるように試みている。これは史料館専任教員という立場から、収蔵史料の教育面における活用を推進するためである。あわせて近年は古文書解読や教養教育の授業を公開授業とすることを通じて、市民の方々へも積極的に門戸を開き、収蔵史料に親しんでいただく機会を増やすようにしている。

そうした中、これまで筆者の授業を数年にわたって継続的に受講していただいた市民の方々より、「古文書や地域の歴史について、さらに自主的な勉強を続けたい」というご相談を一昨年度末に受けた。これに応

じて、筆者が協力するかたちで史料館講義室を使用して、月に一回のペースで開催することになったのが「彦根古文書を読む会」である。

これまで同会に参加されたメンバーを挙げよう。(故)石名栄佑氏、小西眞知子氏、佐々木賢一氏、佐藤多歌子氏、竹内秀雄氏、田附弘明氏、谷川利治氏、西村泰郎氏、福井久子氏、吉田和治氏、渡邊泰子氏である(五〇音順)。

同会では、まず筆者がテキストとする史料を推薦して、それについてメンバー全員で担当箇所を決め、読み合わせをしながら解読を行ってきた。たとえば昨年春以降には、近世(年代は未詳)の江戸から彦根までの旅日記を読み進めた。この旅日記は、筆者が科研費のインセンティブ経費によつて古書店から購入したものである。なるべく近いうちに会として作成した解読文を全文公表したうえで、旅日記自体も史料館へ寄贈して公開できるようにしたいと考えている。

また現在では中井源左衛門家文書よりテキストを選んで解読を行っており、その一冊が安政五年(一八五八)「敷石御寄付連中録」(請求番号七一八二)である。この史料は、近世の仙台藩領にあつて崇敬を集めた塩竈神社(現在の宮城県塩竈市に鎮座)の裏参道に敷石を設置する工事に關するものであるが、総費用一三五〇両のうち中井源左衛門が八〇〇両を提供したことなどが記されている。近江商人とその進出先となった地域社会との関わりを考えるうえで、きわめて興味深い史料である。

この史料はすでに『近江日野町の歴史 第七巻 日野商人編』(二〇一二年)で言及され(宇佐美英機氏執筆箇所)、さらに宮城県の地元紙である『河北新報』のコラム「河北春秋」(二〇一七年二月一〇日)でも取り上げられるなど、注目を集めている。同コラムでは「中井家の

古文書に坂道の総延長や幅、1350両を費やしたことが詳細に書き込まれている。忘れ去られていた江戸時代の大事業が鮮やかによみがえった」と、地元にとっての意義が述べられている。

そこで本稿では、この史料の翻刻文を掲載して広く利用に供することにした(後段「史料紹介①」参照)。

## 二 野寺共有文書目録について

今年度の夏以降、彦根古文書を読む会として初めて目録化作業に取り組んだ史料群が、旧浅井郡野寺村(現長浜市野寺)の野寺共有文書(七十二点)である。本稿では史料紹介②として、その目録を掲載した。

史料群の内訳は、一通(請求番号七二「辰年水損等引高目録」)を除いて全て免定であり、上蓋に「御免定箱 野寺村」と墨書された木製の箱に収められている。もともと継ぎ目がはがれていた史料が多く、古文書を読む会のメンバーもその取り扱いには苦労したようであった。

史料群の中では天和三年(一六八三)の免状(請求番号一)が最も古く、元禄期(一六八八～一七〇三)まではやや欠落があるが、正徳～元文期(一七一～一七四〇)についてはほぼ一貫して残されている。宝暦期(一七五～一六三)、天明期(一七八～一八)の残存状況もよい反面、寛政～安政期(一七八九～一八五九)は大きく欠落している。なお免定の端裏には、全てその作成年代が記されている。

野寺村は姉川の右岸に開けた村で、慶長七年(一六〇二)の検地高は一九五石余、寛永石高帳では二二三石余となっており、うち堀利長領一九五石余・膳所藩領一八石余であった。元禄郷帳では大和郡山藩と膳所藩の相給となっている。

天和三年の免定では石高が一九五石余で、差出は市岡理右衛門となっているが、これは北近江の幕領を統括するために置かれた本郷代官所に寛文四年(貞享二年(一六六四～八五))にかけて赴任した人物である(『米原町史 通史編』二〇〇二年)。すなわちこの時期、野寺村は幕領になっていたと考えられる。

また貞享二年の免定(請求番号二)の差出である渡辺・重野・松本らの名前は、同年から本多氏郡山藩(貞享二年に下野国宇都宮から本多忠平が大和郡山に入封し成立)に入った石馬寺村(現東近江市五個荘町石馬寺)の免定に見られるものと一致する。ここから、この年より野寺村もその大半が郡山藩領になったことが確認できる。その後も免定の差出から判断する限り、石馬寺村と同じく享保八～九年(一七二三～四)には幕領となり、享保九年以降は柳沢氏郡山藩領へと移ったようである(以上、石馬寺村の免定差出人名と領主の変遷については、『五個荘町史 第二巻 近世・近現代』一九九四年を参照)。

姉川沿いの村ということもあり、免定には「年々川欠引」や「当毛水所皆無引」など、水害による引高の記載が多く見られる。このうち、例えば『東浅井郡志』で「大水」が発生したとされる元文三年(一七三八)には、高二二石余のうち「田方 当午無植付并仕付荒皆無引」が一五〇石余にも上り、ほかにも同年の「水込」による引高が複数計上され、残高が三四石余に過ぎないという状態となっている(以上、請求番号三五)。ここから、同年には野寺村もかなりの規模の水害に襲われたと推定される。

翌四年にはこの水害の影響はほとんど免定の上には見られなくなるが、同五年には再び「当申(元文五年)仕付荒引」や「同水込損毛引」

が増え、元文三年ほどの規模ではないものの残高が一二七石余まで落ち込んでいる（以上、請求番号三六・三七）。このように当時の野寺村は、恒常的に水害に見舞われていたのである。

### 三 石原宿文書目録について

本稿の最後に、旧蒲生郡石原村（現蒲生郡日野町石原）の石原宿文書（四三三）の目録を付した（後段「史料紹介③」参照）。この史料群は彦根古文書の会で直接扱ったものではないが、「野寺共有文書目録」とあわせて、この機会に目録を公表することとする。なお石原宿文書については、すでに『近江日野町の歴史 第三巻 近世編』（二〇一三年）や『同 第八巻 史料編』（二〇一〇年）での筆者の執筆担当箇所で言及・紹介しており、史料館では仮目録により閲覧に供していた。

石原宿は御代参街道に置かれた宿駅のひとつであるが、実際には石原村・増田村・小谷村の三村が共同で継立業務にあたっていた。街道をはさんで一続きの景観を構成するこれら三村によって成り立っていたのが石原宿であり、小谷村・増田村が石原村の「加宿」として、合わせてひとつの宿駅分の宿役を勤めていた。このうち石原村は、寛永九年（一六三二）から旗本の最上家領となっていた。また小谷村は旗本の有馬家領であり、増田村は旗本の野一色家および信楽代官の多羅尾氏の相給支配と、三村はそれぞれ領主が異なる。

史料群の内訳を見ると、助郷に関する訴願（石原宿として助郷を要求するものと、土山宿の助郷を課されることの免除を願うものがある）と、領主役所金や三井御殿金などの拝借に関する史料が多い。

御代参街道の宿駅が初めて大掛かりな継立を命じられたのは、寛永十七年（一六四〇）に春日局が伊勢神宮・多賀大社へ参詣するため、御代参街道を通行した時のことであった。小御門村ではこの一件についての留書を保管しており、石原宿は明和元年（一七六四）にその写しを作成している（請求番号四）。この史料によれば、春日局の通行に際して、鋳物師村・増田村・小谷村・上三十坪村・下三十坪村・小御門村が石原村の助郷となったようであるが、臨時の措置であったと考えられる。

正徳元年（一七一）には、朝鮮通信使の来日を控えて公用通行が増えたことを受けて、石原宿では助郷村々を確保するために幕府へ口上書を提出している。ここで助郷として挙げられているのは上麻生村・下麻生村・中山村・大森村・田井村・鋳物師村・三十坪村・小御門村の八村である（請求番号二）。

宝永六年（一七〇九）年には、信楽代官が東海道上山宿の近隣三七村を同宿の増助郷とすることを計画したようで、そこに石原・増田・小谷村も含まれていた。そのため石原・増田・小谷村は、道中奉行所へ助郷の免除を願う。この時の願書（請求番号一）の中で石原・増田・小谷村は、すでに御代参街道で継立を勤めているので、この上に土山宿の増助郷を課されては「御役二重」になり、不都合であると主張している。

明和四・五年には信楽代官が石原・増田・小谷村へ再び土山宿の加助郷を命じており、これに対して三村は同七年に免除を求める訴訟を起こしている（請求番号六）。この時も石原宿は加助郷を免れるのであるが、次第に増田・小谷村や石原宿助郷の村々は近隣の東海道宿駅（水口宿・坂下宿）の助郷へと配置換えされ、文化十年（一八一三）以降の石原宿は助郷を持たされず、石原村のみで継立を行う状態となる（その後の推

移は、前出『近江日野町の歴史』を参照。

また近世の石原宿には、多数の「愛宕・多賀坊人」が居住していた。史料中、この坊人は「愛宕山・多賀社配札修験之者」などとも表記される。坊人は百姓株を有しているが、日頃は諸国へ配札に出ており村内には居住していないため、石原宿の宿役を勤めていなかったとされる（請求番号三七・三八）。

本史料群は、御代参街道という地方の街道の宿駅について、その運営上の実態を知ることができる点で貴重である。今回目録を公表したことにより、さらに研究へ活用されることを期待したい。

### 史料紹介①「敷石御寄付連中録」〔中井家文書請求番号七一八二〕

〔包紙〕「仙台 写し

塩竈敷石寄附書入」

〔表紙〕「壹

敷石御寄附連中録」

一宮御裏坂御華表前分法蓮寺様御門迄間数百六拾六間之所、高低有之通路無然、乍恐

一宮御山内御不相当之御場所柄ニ而参詣之衆被致難義候、依而此度石ノ巻ニ而右之所江敷石仕度、各様江御寄附御頼申上候、右成就仕候者へ万代不易之御事ニ御座候間、思召次第各様御頼申上候、以上

敷石積左二

一間数百六拾六間

幅壹間半

但登り壹間、幅壹間半ニ而、石材石工作料共々金貳両見詰也、敷石厚サ三四寸、長八尺六四五尺迄、石階蹴上ケ六寸平壹尺三寸、縁石ノ幅九寸、此厚サ七寸

此金三百三拾貳両也

一敷方人足

但壹間ニ壹間半ノ所、人足四人懸り、六百六拾四人、日用六日壹切ノ割

此金貳拾七両貳歩貳朱也

一惣石材穀数ニ直し

貳千百石目也

但運送壹艘ニ付、百五拾石目積積見詰、

塩釜引着壹艘ニ付運賃金四両ツ、

此金五拾六両也

三口合 金四百拾五両貳歩貳朱也

登り壹間

壹坪ニ付

幅壹間半

金貳両貳歩懸り也

一間数百六拾六間之内

一五拾五間

石ノ階

一百六拾壹間

縁付敷石

此内

一八拾間也

右寄附料調違相成居候事

鹽竈世話人

田中屋重治郎

同 同

阿部屋三右衛門

天保三年壬辰正月吉祥

- 一間数拾五間 大黒屋惣兵衛
- 一 刀屋茂兵衛
- 一 山田屋新兵衛
- 一 名取屋清七
- 一 後藤屋八兵衛
- 一 得可寿屋忠兵衛
- 一 得可主屋三郎助
- 一 長井屋幸之助
- 一 京屋弥兵衛
- 一 五軒 島屋新八
- 一 十軒 大黒屋庄藏
- 一 奈良屋八兵衛
- 一 三間 小谷屋新右衛門
- 一 金五両 小西屋源八
- 一 金五両 伊藤伝三郎
- 一 伊藤屋伝左衛門
- 一 老間 菊地屋三九郎

追御寄進御頼申上候御事

一宮御裏坂敷石前書御名面之通、御寄進を以去辰年々去年六月まで御普請仕上候処、金配行届兼候ニ付、御見合ニ相成居、然処惣御出来迄ニハ諸方取縮候而も、式百両無御座候へは御成就相成兼候間、思次第御寄進被成下度奉願上候、全体初発見詰ニハ間数百六拾六間之所、平均老間ニ付式両式歩、惣高四百拾五両程ニ而出来之見当ニ御座候処、追々石財ハ不及申、据方等各別ニ念ヲ入候事ニ罷成、夫丈諸入料相過、老間ニ付四両三步程之懸合ニ相過、万代不易之事ニ而、龜抹ニ而ハ補保之間無心元との義、御向々様よりも被仰渡、尚又職人共今も申聞、無余義前文之通掛増ニ相成、惣御出来ニハ八百両已上之見詰ニ相成、是迄御寄進被成候分ハ三百両程ニ而、其余拝借等仕、当時迄六百両程之御普請仕上、御普請懸り所式百両御座候得は、御出来ニ相成候見詰ニ御座候間、拝借之所ハ御金主様方へ追々御吟味申上候間、先以御出来懸之所ハ式百両御寄進被成候得は、御出来ニ相成候間、前書之通願上候間、何卒御寄進被成下度奉願上候、以上

塩竈町世話人

阿部屋三右衛門

天保六年六月

安政四巳歳十一月中、宮城郡

御代官

御勤仕八卷新五郎様

一ノ宮御裏坂敷石御世話申上候次第、委曲御尋被成下候ニ付、書面ヲ以相認、如是御披露申上候、以上

御城下六仲間商人中井新三郎等ヲ始メ、諸荷物問屋宮城郡塩釜町百姓三四郎義、一ノ宮御裏坂通路次無然候ニ付、敷石御普請之義、御世話申上候ハ、諸参詣候輩、何程歟心安可在御座義と、年来考弁仕、右御世話制道仕上、出来罷成候節之次第、委細ニ可申上旨、被仰渡承知仕、左ニ申上候

一ノ宮裏坂御鳥井前<sup>（ツツミ）</sup>法蓮寺様御門前迄之間、大図間數百七拾間余之御場所、拔石多ニ而高低通路甚無然、乍恐

屋形様 御参詣被遊 御通行候節者、何時ニ而茂其時々台地水溜り等之場所江は置土又ハ土俵等ヲ以御道拵罷成候処、元之義石地ニ御座候得は、両毎ニ押流相保不申候、尤法蓮寺様御日参之御道筋ニ茂在之、尚亦諸人参詣之者共、繁多通行一統難儀仕候次第、難相忍候ニ付、年来工夫仕、何様ニか切石ヲ以テ敷石立派ニ御普請仕上候ハ、乍恐

上々様 御参詣ヲ奉始、諸人一統心能参詣も可仕、就而は 御当国随一之 御大守

御所柄之義ニも御座候得は、御他邦江対候而茂、彼是可然御義と勘弁仕、取立相企候訳ニ御座候、乍去中々以不尋常广大之御普請ニ在之、素合三四郎義は連々不如意之相統躰ニ御座候得は、自力ヲ以は迎も難相及次第ニ御座候間、天保三年三月中 御城下大町壱丁目中井新三郎筆頭、六仲間商人共江品々頼入、右間敷之所、幅壹間半之敷石、所々江階相付、切石ヲ以御普請仕上度段、及相談ニ候処、中井新三郎始都合廿八人、何れ茂不背呉取立、御世話之義は三四郎并重治郎兩人差配指働候様、右新三郎等合申来候ニ付、右之趣キ法蓮寺様江書面ヲ以、願申上候処、御直々御達被成下、同年四月中御下知被仰渡候ニ付、三四郎・重治郎兩人、直々牡鹿郡井内山所江罷越、石工之者共江折入吟味之上、右石為切出、石ノ

卷今塩釜迄船積ニ而相廻候手段ヲ始、万端手配仕、三四郎義は山所江數度罷下り、葬と制道相尽罷在候処、同年八月中重治郎病氣付、終病死仕候処、右切石等大御普請之義ニ御座候得は、三四郎壱人ニ而は諸事行届兼候哉も難計旨、右新三郎へ品々打合候処、縦令大行ニ候共、今更余人可相加様無之訳ニ候間、乍此上三四郎壱人ニ而何分指働制道仕、御普請成就仕候様、押而被相頼候ニ付、無余義次第と請合、翌四年早春合地場直方并敷石等江取付申候処、中々以大御普請之事なれば、山所石切出方等取果取不申、当所ニ而相雇候職人共、大勢休居候様ニ而は、日數も相懸り候様ニ罷成候得は、職人共等凡而迷惑仕候ニ付、其節宮城御勤仕御代官服部伊左衛門様江願上、右石切出し何分ニ茂出情取果取候様等、牡鹿御勤仕御代官様三浦源五右衛門様へ品々打合し、御紙面被成下候ニ付、其後切出し運送等格別ニ抄取、津着罷成、三四郎葬ト立懸り、制道敷方為仕候処、同五年春迄ニ段々出来ニは罷成候得共、五拾間程之所、敷懸りニ罷成候処、段々階等相付候得は、最初之大図積り合は遙二間數茂相延、式百間余ニ罷成、勿論見当通り合ハ金子莫大之懸高ニ相成候ニ付而は、六仲間之方ニ而茂、先以御普請半途ニは候得共、見合ニ相成、休ニ罷成申候、然ニ三四郎義、數年来斯迄精魂相尽制道仕候義、今更半途ニ罷成候義ニ而ハ、甚敷残念千万と奉存候方合、嘉永貳年中六仲間商人共合金子貳百兩借受、前条半途之所ヲ足繼御普請仕上、同年春合又々右御普請江取付、秋中迄ニ漸ク惣出来と罷成候義ニ御座候、惣仕揚之上、間敷取調申候処、最初大凡見詰合は三拾間余間敷相延候ニ付、色々吟味仕候処、所々江階相付候間、工數も相増、夫丈間敷相延、都合式百間余ニ罷成申候、猶亦入料懸高取調申候処、山所石切出日雇ヲ始、石ノ卷合塩釜迄運送、敷石方諸職人日雇賃迄合式之入料、金千三百五拾兩之懸高と



佐藤屋善右衛門

一同五両也

同式丁目

安藤新右衛門

一同五両也

同四丁目

小西屋源八

一同廿五両也

同 同

大黒屋庄蔵

一同拾五両也

同国分町

小谷新右衛門

一同拾五両也

同大町四丁目

島屋新八

一同五両也

同大町四丁目

杉岡屋富右衛門

一同五両也

同 同

奈良屋藤七

一同三拾五両也

同国分町

奈良屋作兵衛

一同五両也

同 同

伊勢屋才蔵

一同五両也

同 同

菅野屋喜兵衛

一同五両也

同南町

小西利右衛門

一同五両也

同大町二丁目

伊藤伝左衛門

一同五両也

同北鍛冶町

菊地三九郎

一同五両也

同下河原五軒茶屋

源蔵

一同貳百両也

敷石世話人

塩釜町

阿部三四郎

都合廿九人

金高千三百五拾両也

右之通取調申上候、已上

宮城郡塩釜町御百姓三四郎

当時養賢堂御造船方下役

阿部三四郎

安政五年

高指引人

九月

豊吉

同郡同町与頭

孫七

肝入検断

伊三郎殿

庄太夫殿

金五郎殿

右之通取調申上候様、順々御下知二付、九月朔日、如此相認メ検断  
手前へ差出申候事